

「PTAの成立：母親教育から親と教師の協力へ」

天野 かおり

(2001年9月28日受理)

The formation of PTA : from mothers education to co-operation of parents and teachers

Kaori Amano

The purpose of this paper is to consider the formation of PTA. The direct ancestor of the National Congress of Parents and Teachers is the National Congress of Mothers. The National Congress of Mothers was organized by two women of Alice M. Birney and Phoebe A. Hearst in 1897. The president, Mrs. Birney declared the object of the Congress is to educate mothers at first convention. 11 years later, the Congress changed its name to the National Congress of Mothers and Parent-Teacher Associations. And more 17 years later, the Congress changed its name to National Congress of Parents and Teachers again. The question now arises : Why did the Congress need to change its name? This question drives us to examine of the parent-teacher relationship, and to relate its relationship to educating mother.

Key Word: parent education, child welfare, PTA

キーワード：両親教育、児童福祉、PTA

はじめに

今日、アメリカPTAとして知られる“全米父母教師会議(National Congress of Parents and Teachers)”の創成の歴史をたどると、その起源は、1897年に結成された“全米母親会議(National Congress of Mothers)”にまで遡ることができる。この“全米母親会議”は、アリス・バーニー(Birney, Alice M.; 1858～1907)とフェーブ・ハースト(Hearst, Phoebe A.; 1842-1919)¹という2人の女性によって、ワシントンD.C.にて創始されたものである。結成大会の「歓迎の辞」²においてバーニーは、“全米母親会議”の目的と必然性を次のように説明した。「新たに誕生した精神の最高の発達を促進するような環境、そのような環境を幼子のそれぞれに与えるという人類に課せられた責任感、その責任感を人類に自覚させることを女性が先導するのは当然です」³。彼女は、子どもの発達を保障することは人類の責務であり、その責務の自覚を広く社会全体に求めて行動を起こすのは、子育てを主に担う母親として当然の使命だと主張した。そして、バーニーはそのような母親としての使命、つまり、狭義には我が子の子育てという母親自身を含めた意味での家庭環

境の向上への努力、広義には我が子の子育てを取り巻く社会環境の改良への行動、これら2点における母親自身の無知、無関心が、子どもの発達にとって最大の障害となっていると指摘し、この現況を改善することが「子どもを救う」⁴ことになることと強調した。そこで彼女が「子どもを救う」ための具体的方策として提唱したのが母親教育である。

「子どもを救う」ための母親教育というバーニーの構想を起点として成立した“全米母親会議”は、創設後11年を経た1908年に、“全米母親会議と父母教師協会(National Congress of Mothers and Parent-Teacher Associations)”へと名称の変更を行う。そしてさらにその17年後である1925年、現在の名称“全米父母教師会議”に至った。そこには母親教育を掲げて創始された会が、PTAという父母と教師の協会へとその主眼を移していった事実が如実に示されている。PTA運動の歴史を考察するにおいて、この事実を問うことなしにPTA運動を内在的に理解することはできないであろう。

現在まで、PTAに言及した研究はいくつか散見できる⁵。しかし、そのほとんどがPTA運動そのものをテーマとするものではない。それゆえ、なぜ教師との

「協力」、および学校という場が重視されるに至ったのかについては未だ明らかとされていない。

そこで本研究では、“全米母親会議”がいかなる理念と背景のもとに、父母と教師の関係を問題視するようになったのか、またそのような意識が学校と母親教育にどのように結びついていたのかに着目し、PTAの成立について検証する。

I. 母親と幼稚園教師との「協力」

“全米母親会議”の初代会長として5年間にわたってPTA運動を先導したバーニーは、母親教育のテーマとして児童研究を推奨した。彼女は児童研究を母親の学習テーマとして、「あらゆる点において、広く、深いテーマで、最も価値のある」⁶と絶賛している。この児童研究をモチーフとする母親教育という構想にいち早く共鳴し、“全米母親会議”の結成、発展に寄与したのは幼稚園運動のリーダーたちであった。その背景には、当時幼稚園運動がおかれていた状況が交錯している。

結成大会において「母親にとって幼稚園は何を意味するか」⁷という題目で講演を行ったのは、シカゴの著名な幼稚園教師であるアマリー・ホフナー（Hofer, Amalie）であった。その彼女が序文を寄せている『アメリカ幼稚園発達史』によれば、幼稚園運動の生成と展開という観点から、1880年から現在（1907年）までの時期は「拡張期」として捉えられる⁸。また特に、そのうちの1880年から1890年までが「（幼稚園）協会の10年」、1890年から1900年までが「公立学校の10年」とされている⁹。全米母親会議の結成された1897年はこの「公立学校の10年」にあたり、幼稚園が公立学校システムの一部として組み入れられるよう、幼稚園運動が各方面に働きかけを行っていた時期である。実際、幼稚園に在籍する幼児の総数に対する公立学校幼稚園のそれは、1889年では48.5パーセント、1899年では54.5パーセントであったものが、1909年では84.9パーセントと顕著な伸び率を示している¹⁰。

ところで、「公立学校の10年」に幼稚園運動が最大の課題として当面していたのは、幼稚園に関する必要経費の問題である。一般に、幼稚園は小学校よりもその経費が遥かにかかると考えられていたうえに、就学年齢に関する学校法規によって幼稚園を公費で維持することには制限があった¹¹。それゆえ幼稚園運動の立場からすれば、母親教育のネットワークに参画することは次の3つの点で多大なメリットがあった。第1には、母親たちの幼稚園教育への関心を高め、その理念と実践に対する理解を促進するであろう点。第2に、その

ような啓蒙によって触発された母親たちが、幼稚園教師のアシスタントとして有為のボランティアとなるであろう点。これによって幼稚園はその人件費をかなり低く抑えることが可能となり、小学校よりも経費がかかるという一般の認識を説得することができた。第3に、それらのことが幼稚園の公立学校システムへの組み入れを推進する強力な契機となるであろう点である。

先に述べたホフナーは、結成大会で母親たちを前にこう主張した。「いわゆる幼稚園の授業は、それ自身で社会改革や教育運動における先導役を果たすものではありません、しかし、子どもを教えるに役立つ、より良い方法を与えるものです」¹²。彼女によれば、母親にとって幼稚園の有益性には大きく2つある。1つには、幼稚園が子どもに対し「科学的な子育ての方法」¹³を実践していると同時に、母親に対してもそれを教え広めるといふ母親教育を試みることによって、家庭の教育機能の代行、ならびに再生に貢献している点。もう1つには、幼稚園が家庭の教育機能の代行、ならびに再生をもたらすことによって、教育されないままに放置され、いずれは州の矯正施設に収容されることとなるような子どもの逸脱を予防する。その結果、それらの州施設を減じることが可能となり、州の歳入は大幅に削減される。したがって、州の矯正施設に収容されている多数のならず者のために多額の税金を浪費するよりも、幼稚園を公費で維持する方が実は極めて経済的である点。以上2点の有益性を根拠に、ホフナーは幼稚園が公立学校システムの一部として組み入れられることの必要性を訴えた。

他方、もう1人のシカゴの著名な幼稚園教師であるフランシス・ニュートン（Newton, Frances）は、「母親の最大のニーズ」¹⁴とのタイトルで講演した。その中で彼女は、独身で子どもを持たない身でありながらも幼稚園教師として母親についての協議に加わることが何ら不自然ではないどころか、十分な根拠があることを次のように説明している。「なぜなら、子どもたちが自分自身の家庭で手に入れるはずのもの、それぞれの子どもが自分の父親と母親に求める権利を持っているにもかかわらず、頻繁には受け取っていないもの、それを私は自分の小さな“幼稚園家庭”で与えようと数年にわたり試みてきたからです」¹⁵。ニュートンにとって、まさしく幼稚園とは家庭に他ならない。なおかつ家庭においては十分ではないものを完備している理想的な家庭である。幼稚園が理想的な家庭であるならば、幼稚園教師は理想的な母親といえた。そこで彼女は、理想的な母親となるために母親教育の一環として、母親が幼稚園で丸1年間にわたる実習を積むことを提言している。幼稚園教師のアシスタントという経験学習

が、「母親の最大のニーズ」の1つを満たす非常に有効な手段であることを強調した。

さらに第2回大会ではあるが、やはりニューヨークの著名な幼稚園教師であるメアリー・バトラー（Butler; Mary L.）が、「すべての母親を幼稚園教師に」¹⁶とのテーマで講演し、同様の主張を行っている。彼女は前述のニュートンとともに、バーニーから全米母親会議の着想を打ち明けられ、その結成に貢献、結成大会では通信書記まで務めた人物である。「科学的、技術的な幼稚園教育は、すべての母親にとって最も望ましい」¹⁷とのバトラーの言辭が、全米母親会議の幼稚園教育に対する基本的姿勢を代弁しているといっても過言ではないであろう。

以上の3人の主張に代表されるように、全米母親会議においては幼稚園の振興が母親教育にとって大きなメリットであると捉えられた。結成大会の決議文には次のようにある。「私たちは公立学校に幼稚園部門を附設するため、各州ならびに準州での立法を促進することに私たちの影響力を用いることを決議した」¹⁸。そこには、幼稚園＝家庭、ゆえに幼稚園教師＝母親という認識の構図を見て取ることができる。母親と幼稚園教師とは、「子どもを救う」という同じ目的に同じ努力を重ねる女性同士であり、それゆえ、両者の関係は極めて親和的で、対立的に捉えられることはなかった。

Ⅱ. 母親と学校教師との「協力」

母親と幼稚園教師との親和的な関係に対し、母親と学校教師の関係はどのようなものだったのであろうか。結成大会にワシントンD.C.から参加したウィルバー・クラフツ（Crafts, Wilbur F.）の「母親と学校」¹⁹という講演の中に、その実態を垣間見ることができる。「母親はもしも通りで我が子の先生にあってとしても全く気付かないでしょう。他方、先生も母親に気付くまい」²⁰。ここには、母親と学校教師がいかに疎遠な関係にあったのかが端的に語られている。そして彼女は、「我が子が家にはいない5～6時間、我が子を取り巻いている環境について、母親たちはほとんど何も理解していません」²¹と、学校に対する母親の無関心な姿勢に強い危惧を表明している。

このような危惧に至ったクラフツの見解は、実は彼女の学校教師としての経験に依拠している。彼女はかつて学校教師であったとき、「母親が校舎へとやって来るただならぬ光景が、常に私を恐怖で満たしていた」²²と告白している。なぜなら、母親が学校へやって来るのは、苦情の申し入れ以外の何ものでもなかったからだと言う。しかしながらその体験は、学校教師には共

有されるものの、幼稚園教師には共有されていないこともまた明かしている。つまり、学校教師と幼稚園教師とでは、母親との関係性が全く異なっていると指摘しているのである。クラフツはその点を問題とした。そして彼女は、学校の成り立ちという視点から家庭と学校との本来的な関係について論じている。

クラフツによれば、アメリカ社会が未熟で、個々の家庭が散在していた時代には、当然ながら子どもの教育は各家庭で親が教えるという形態で行われていた。しかし、アメリカ社会の人口が増加し、地域社会の密集度が高まるにつれて、またアメリカ社会の成熟とともに、近隣の家庭が共同で教師を雇用するということが広く行われるようになった。それゆえ、近隣の子どもたちを一ヶ所に集めて教育をするための「共有の場所として」²³、校舎が選定される。雇用された「教師は“近所に賄い付きの下宿”をした」²⁴。これが学校の原初的な形態であり、この段階での学校は、その管理運営の権限が学校自身にはなく、教師を雇用した近隣家庭にあるという点で、「家族の問題」²⁵であったと彼女は言う。

さらに、「子どもの数が増加するにつれて、より大きな校舎とより多くの校舎を建てるが必要となりました、そうして学校システムが確立しました」²⁶。そのときから親たちは、「“レッセ・フェール”というフランスのモットーを、言うなれば、“学校を放っておこう、それは自ら展開するさ”という風にアメリカ化しました」²⁷。つまり、学校そのものの規模が拡大するにつれて、および学校という近隣同士の教育システムが整備されるにつれて、学校に対する家庭の関心が次第に薄れていったとクラフツは指摘する。その結果、そもそも家庭教育の代行を目的として設けられたはずの学校が、「家庭から乖離した独自の施設」²⁸となっていることを彼女は警告しているのである。彼女は言う、「私たちの学校は、実習や宗教の授業をほとんど欠いている一真の家庭とは似ても似つかないものになってきました」²⁹。職業準備教育や宗教教育といった、家庭であれば当然行われるはずだと彼女が信じる教育内容が、家庭のコントロールから学校が離脱するとともに、学校教育から抜け落ちていったことを彼女は憂慮している。このような現況の原因を、クラフツは「学校への家庭の関心と協力」の衰退にあるとし、「学校への家庭の関心と協力の復興（renaissance）」³⁰を訴えたのである。

そしてクラフツは、次のように学校の理想像を描写する。「校舎の周りには母親の輪があります。教師は統括の天才です、そして、あらゆる出身国や社会的地位の、幼い少年少女たちは、アメリカ精神を創出するために統合される素材です」³¹。世紀転換期のアメリカ社

会において、移民問題がさらに都市問題と相俟って大きな社会問題となっていたことは周知の事実である。そのような時代にあつてクラフツは、学校教育が「アメリカ精神の啓培」³²のための拠点、すなわち、移民にとっては母国の家庭教育ではなく、アメリカの家庭教育の拠点となるべきだと主張した。その際母親は、「学校への家庭の関心と協力」を絶やすことなく持ち続けなければならない。なぜなら学校は、「家庭生活を拡大したもの」³³に他ならないのであるから、家庭教育を主に担う母親が学校教育に参加することも当然の責務と考えられた。彼女は言う、「父母が家庭教育を分かち合うように、母親は公教育の構想においても父親と分担しましょう」³⁴と。

そこでクラフツは、「学校への家庭の関心と協力の復興 (renaissance)」を実現させる方策として、特に母親に以下の3項目を提言した。「1、我が子の通う学校を頻繁に訪れること；2、我が子の教師と徹底的に知り合いになること；3、学校の構想への協力」³⁵。そこには幼稚園教師と母親との関係性が理想とされていることを認めることができる。実際、彼女がこの講演の中でフレーベルの実践した幼稚園のシステムを「“母性の科学”」³⁶だと称賛し、「幼稚園システムの真髄は母性です」³⁷と言及していることから、幼稚園教育についてかなりの見識があつたことは想像に難くない。つまり彼女は、家庭教育を集団で行うという学校教育本来の機能を「復興」させるには、幼稚園教育における母親と教師との関係性を学校においても実現することが不可欠だと考えた。

学校教育は家庭教育の補償をするものと捉える主張は、第2回大会におけるメアリー・ボーランド (Bourland, Mary C.) の講演「公立学校と親の関係」³⁸にも見ることが出来る。彼女もやはり学校は親の意思によって設けられるべきだと認識を示しながら、「家庭状況の不均衡を均等化する」³⁹ことこそ学校教育に求められている役割だと述べた。ボーランドにとっては、「家庭生活のうち極めて必要とされている要素をスラムの子供たちに供給している」⁴⁰こと、すなわち、学校が貧富の差に関わらず、本来家庭で受けるはずの教育をすべての子どもに供与していることが重要であつた。さらに、学校における集団教育は、他者に貢献できる、あるいは他者に奉仕できるという理想的アメリカ市民へと、子どもを一樣に向上させる傾向があると信じられた。

クラフツ、そしてボーランドの主張に共通しているのは、学校教育を家庭教育の延長線上に捉えようとする見方である。そこには、学校教育によって家庭教育の不備を補うことが可能だと強い関心がある。と同時に、そのような関心が常に幼稚園教育との比較によつ

て刺激されていたことが示唆されている。幼稚園教育によって啓発された母親たちが、幼稚園の公立学校システムへの組み入れという運動を契機に、学校教育へその関心を拡大させたと考えられる。

Ⅲ. 母親教育から親と教師の「協力」へ

1897年の結成大会でクラフツの提言した「学校への家庭の関心と協力の復興 (renaissance)」に加え、その後も活発に学校への関わりを説くレポートがなされている。1898年の第2回大会では、書記に名を連ねるベスタ・キャセディ (Cassedy, Vesta H.) が、「母親と教師」⁴¹とのタイトルで講演している。

彼女は、母親と教師、両者を繋ぐ子どもの本質 (nature) を「生け垣」に喩えてこう述べている。「教師は自分の専門性を拡大し、生け垣の自分の側を注意深く剪定します。母親は自分の使命を高め、生け垣の自分の側を剪定します。それでもなお生け垣は、完全な美しさに発展してはいないのです」⁴²。そこでキャセディが問題としているのは、「母親と教師の共感的理解」⁴³が欠如していることである。それはすなわち、子どもの身体的、精神的ニーズへの対応を母親と教師の両者が共有していないことを指す。それゆえ彼女は、「母親が教師の目的、精神的原理、および道徳的展開を理解しなければなりません」⁴⁴と主張する。彼女の主張の中心は、母親自身が十分な学習を積まない限り、学校教師との優れた「協力」関係を築くことはできないという点にある。教師の我が子への指導の1つ1つの意義が母親に理解されること、すなわち、教師の教育目的から教育方法に至るまで理解し得るほどの知識を母親が教育されることを理想としている。

あるいは、結成大会より副会長の座にあるメアリー・マンフォード (Mumford, Mary E.) は、1899年の第3回大会における「教育に対する親の義務」⁴⁵というレポートの中で、「もしもアメリカの教育が遅れているのならば、それは親の無知と無関心によるものです」⁴⁶と述べている。親は教育方法について「無知」であり、我が子の通う学校に「無関心」とであると言う。それゆえ教師にとって、親は単に「苦情と非難の事態を引き起こす」⁴⁷輩でしかないと言及する。このような現況に対し、彼女もまた母親教育として、1年間の幼稚園教育の実習を勧告している。なぜなら、母親たちが教育されていないために、優れた学校教師たちの努力が支援されることなく水泡に帰しているからだと言う。また、母親教育の欠如は、「貧弱な指導に加え、学校全体のシステムのひどい管理をも許容して」⁴⁸いるとも批判する。マンフォードにとって学校教育の向上は、す

べて母親教育にかかっていた。

キャセディ、およびマンフォードのいずれもが主張するのは、学校教師の専門性に敬意を示したうえで、母親教育によって母親も学校の教育原理に精通することを理想とした点である。この発想はまさしく、学校教育を家庭教育の延長線上に捉え、と同時に、幼稚園教育を家庭教育の理想像とする見識に基礎付けられている。幼稚園がフレーベル主義を教育原理とするならば、それを理想とする家庭教育もフレーベル主義に立脚し、したがって、家庭の延長線上にある学校もフレーベル主義を教育原理とする。幼稚園をそのシステムの一部に組み入れた学校教育全体をフレーベル主義という同じ教育原理に基づいて構想しようとするものであろう。

結成大会後まもなくまとめられた「全米母親会議の基本方針の宣言」⁴⁹には、全米母親会議の目的が次のように謳われている。「人類愛と愛国心を教え込むこと、家庭の影響と学校生活のより親しい関係を奨励すること、揺りかごからカレッジまで幼稚園の原理を浸透させること」⁵⁰。また第2回大会においても、変わらず幼稚園を支持し、大学および師範学校に、子どもについての科学のための講座の創設に努力することが決議されている。公立学校と州立大学に家政学の授業を設けることへの支援も表明されている⁵¹。そこに示唆される「学校への家庭の関心と協力」とは、母親教育によって啓発された母親による、学校教育の改善への意欲をも包摂するものであった。

他方、学校にとっては、「学校への家庭の関心と協力」が、常に好ましいものであったわけではないようである。第3回大会で、「学校に対する親の協力の重要性」⁵²とのタイトルで講演をおこなったのは、ワシントンD.C.にあるウエスタン・ハイスクール(Western High School)の校長、エディス・ウエストコット(Edith Westcott)だが、彼女によると、学校教師が望んでいる親の「協力」とは、母親が学校の教育方法について理解することではないと言う。「子どもに適切な食事を与え、洋服を着せ、規則正しく出席させ、学校が重要であるという意識を植え付けること」⁵³、すなわち子どもの身体的ニーズを満たし、学校へ出席させ、学校を母子ともども重視するという親の従順な姿勢こそが求められているのだと訴えた。

1905年の第9回大会にも同様の主張がみられる。ニュージャージー州の州都トレントン(Trenton)の学校教師であるリリー・ウィリアムズ(Williams, Lillie A.)は、「家庭と学校の協力」⁵⁴についてレポートしている。その中で彼女は、家庭と学校の隔絶の原因を次のように説明した。「それ(家庭と学校の完全な分離)は、進

歩主義的教師の意図と目的において、近年、起きている深遠な変化を親があまりに理解していないという事実から主として起きている、と私は考えます」⁵⁵。

ここでいう「深遠な変化」とは、教師たちが教育を「最も個別的な種類の活動」⁵⁶と捉えるようになったこと、すなわち、個々の子どもにとって適切な教育方法は、「それぞれの子どもの関心と経験についての知見に基づいて」⁵⁷選択されるべきだと考えるようになったことを指す。このとき、「子どもの関心と経験についての知見」を最も多く有するのは母親である。したがって、教師にとって必要なのは、個々の母親からそのような「知見」、つまり「子どもの特性」⁵⁸を的確に入手できることであり、「子どもの特性」を教師に伝えられるほどそれぞれの母親が賢明であることであった。

ところが、ウィリアムズはこうも述べている、「私たち教師が描く理想は、高度な教育を受けた女性が学校を時おり訪問することではありません、そのような女性自身の子どもはおそらく既に自立しているでしょうが」⁵⁹と。そこには、子育てを終えた、幼稚園教育に通曉しているような女性たちによる「協力」を、必ずしも歓迎しない学校教師の本音が吐露されている。我が子を健康に保つこと⁶⁰、家庭の教育方針が学校の規律、および懲罰に矛盾しないこと⁶¹、我が子の身体的、精神的障害を把握し、教師に告知すること⁶²、そして学校の衛生面、設備面についての整備を要求する世論を先導すること⁶³。以上、彼女によって言及された「家庭と学校の協力」の内実も、結局は母親が学校に同調することを期待するものであった。

幼稚園教師に目を転じれば、第3回大会において、国際幼稚園連盟(International Kindergarten Union)会長でもあるルーシー・ウィーロック(Wheelock, Lucy)が、「フレーベルの“母親のための教科書”」⁶⁴と題し、母親たちにフレーベルについて手ほどきしている。それは、学校教師であるウエストコット、ウィリアムズが唱える母親と教師の「協力」が、ともに母親の恭順や同調を意味し、教育原理を母親と共有することを意図しないことと実に鮮やかな対照をなしている。つまり、全米母親会議の唱える学校への「協力」と学校の求める「協力」とでは必ずしも一致していなかった。

おわりに

全米母親会議は、母親教育をその主たるテーマとして誕生した。その際、深いつながりを持ったのが幼稚園運動である。当時の幼稚園は、発達史上の「拡張期」にあり、公立学校システムの一部として組み込まれることを活動目標の1つとしていた。それゆえ、母親教

育を介して幼稚園の有益性を広くアピールし、幼稚園に対する関心と理解を得ることに努めていた。幼稚園運動はその教育実践が家庭教育のお手本となることを説くと同時に、幼稚園が理想の家庭の体現であり、したがって幼稚園教師は母親のお手本として最もふさわしいことを強調した。全米母親会議はこの見解を支持した。

一方で全米母親会議には、その成り立ちから学校と家庭との関係性を考察し、学校教育を家庭教育の延長線上に捉えようとする見方もあった。ところが、「学校への家庭の関心」は既に衰退し、学校と家庭との間はまったく疎遠な関係となっていた。しかし、理想の家庭の体現である幼稚園を公立学校システムの一部としようとするとき、家庭教育の延長線上にあるはずの学校教育が、母親たちの問題意識を揺さぶらないはずはなかった。そこには、幼稚園教育も学校教育も家庭教育の不備を補うに、優れた手段であるとの関心があった。世紀転換期のアメリカ社会において、移民のアメリカ化は家庭教育の問題でもあったことは言うに及ばないであろう。

全米母親会議の母親たちは、幼稚園の教育原理に精通していたことによって、幼稚園教師と親和的な関係を築いた。そして、学校教育にも同じ教育原理の導入を提唱した。この点において、全米母親会議の学校への「協力」とは、母親教育を機動力とする学校教育の改善の意欲をも包摂するものであった。

しかしながら、この意欲が常に学校に歓迎されたわけではないようだ。むしろ学校教師は、学校の指導に従順であってくれることを望んだ。まさに、全米母親会議の唱える学校への「協力」と学校の求める「協力」とは必ずしも一致しなかったところに、母親教育から親と教師の「協力」へとその姿勢をシフトさせる要因があったのである。

¹ James, E. T., ed., *Notable American Women, 1607 - 1950: a biographical dictionary*, Belknap Press of Harvard University Press, 1971, II - p. 171. によると、“Phoebe”のスペルは後年になって用いられたもので、もともと“Phebe”であった。

² Rothman, D. J. and Rothman, S. M., ed., *National Congress of Mothers: Women & Children First*, Garland Publishing Inc., 1987. (“The Work and words: First Annual Session”, “Report of the Proceedings of the Second Annual Convention”, “Proceedings of the Third Annual Convention”), I - pp.6 - 10.

³ *ibid.*, I - p.9.

⁴ *ibid.*, II - p.15.

⁵ P T A運動に言及した主な文献は以下の通り(年代順)。Overstreet, H. and Overstreet, B., *Where Children Come First: A Study of The P. T. A. Idea*, National Congress of Parents and Mothers, 1949. Mulligan, J., *The Madonna and Child in American Culture 1830 - 1916*, Ph. D. Dissertation University of California, UMI, 1975.

Schlossman, S. L., “Before Home Start: Notes toward A History of Parent Education in America 1897 - 1929”, *Harvard Educational Review*; v46, n3, 1976, pp.436 - 467.

Rothman, S. M., *Woman's Proper Place - a History of Changing Ideals and Practices, 1870 to the Present -*, Basic Books, Inc., Publishers, 1978. 堀和郎「アメリカにおけるP T Aの起源」『教育と医学』、1977年2月、pp.96 - 102。

⁶ Rothman, D. J. and Rothman, S. M., ed., *op. cit.*, I - p.7.

⁷ *ibid.*, I - pp.55-61.

⁸ ニーナ・C・バンデウォーカー(中谷彪監訳)『アメリカ幼稚園発達史』教育開発研究所、1987年、p.7。

⁹ 同上書、p.164。上野辰美『アメリカ幼稚園教育の公教育性発展過程に関する研究』風間書房、1995年、p.119。

¹⁰ 同上書、p.101。

¹¹ バンデウォーカー、前掲書、pp.164, 166。上野辰美、前掲書、pp.94、119-120。

¹² Rothman, D. J. and Rothman, S. M., ed., *op. cit.*, I - p.56.

¹³ *ibid.*, I - p.58.

¹⁴ *ibid.*, I - pp.148-154.

¹⁵ *ibid.*, I - p.148.

¹⁶ *ibid.*, II - pp.160-164.

¹⁷ *ibid.*, II - p.160.

¹⁸ *ibid.*, I - p.270.

¹⁹ *ibid.*, I - pp.72-80.

²⁰ *ibid.*, I - p.74.

²¹ *ibid.*, I - pp.73-74.

²² *ibid.*, I - p.74.

²³ *ibid.*, I - p.74.

²⁴ *ibid.*, I - p.74.

²⁵ *ibid.*, I - p.74.

²⁶ *ibid.*, I - p.74.

²⁷ *ibid.*, I - p.74.

²⁸ *ibid.*, I - p.73.

²⁹ *ibid.*, I - pp.74-75.

「PTAの成立：母親教育から親と教師の協力へ」

- 30 *ibid.*, I -p.74.
31 *ibid.*, I -p.76.
32 *ibid.*, I -p.76.
33 *ibid.*, I -p.73.
34 *ibid.*, I -p.75.
35 *ibid.*, I -p.75.
36 *ibid.*, I -p.73.
37 *ibid.*, I -p.73.
38 *ibid.*, II -pp.67-68.
39 *ibid.*, II -p.68.
40 *ibid.*, II -p.68.
41 *ibid.*, II -pp.109-113.
42 *ibid.*, II -p.109.
43 *ibid.*, II -p.110.
44 *ibid.*, II -p.110.
45 *ibid.*, III -pp.261-262.
46 *ibid.*, III -p.261.
47 *ibid.*, III -p.261.
48 *ibid.*, III -p.261.
49 *ibid.*, I -pp.273-275.
50 *ibid.*, I -p.273.
51 *ibid.*, II -pp.168, 169.
52 *ibid.*, III -pp.262-263.
53 *ibid.*, III -pp.262-263.
54 National Congress of Mothers 1905, National Congress of Mothers, 1905, pp.181-187.
55 *ibid.*, p.182.
56 *ibid.*, p.184.
57 *ibid.*, p.185.
58 *ibid.*, p.184.
59 *ibid.*, p.186.
60 *ibid.*, p.184.
61 *ibid.*, p.184.
62 *ibid.*, pp.184-185.
63 *ibid.*, p.187.
64 Rothman, D. J. and Rothman, S. M., *ed., op. cit.*, III - pp.259-260.

(指導教官 坂越正樹)